

## 『上唇小帯の乳幼児期における特徴』 参考資料の作成について

(一社) 兵庫県歯科医師会

この度兵庫県歯科医師会では、公益社団法人神戸市歯科医師会作成の『上唇小帯の乳幼児期における特徴について』をご厚意により改変作成しました。

1歳6カ月児健診ならびに3歳児健診時、健診前にご一読いただき、上唇小帯異常の判定にご活用ください。

また、保護者にも成長に伴う変化を示していただければ効果的です。

是非とも、ご活用いただければ幸いです。

### 【添付資料】

- ① (県民向け) 上唇小帯チラシ
- ② (歯科専門職種向け) 小児歯科学会文献より

## 上唇小帯の乳幼児期における特徴について

上唇小帯は、生まれたての赤ちゃんでは比較的太く厚みがあり、乳歯の生えてくる部位の近くに付いていますが、発育につれて次第に細く薄くなり、付く位置も歯から離れていくといわれています。



① 10ヵ月の赤ちゃんで、上唇小帯が上の前歯の間に入っているということで来院されました。経過をみることにしました。



② 1歳3ヵ月のときの上唇小帯は、まだ歯の間まで伸びています。



③ 2歳6ヵ月。歯から離れて上のほうに位置しています。これは、歯槽骨（しそうこつ）という歯を取り囲む部分の骨が成長したためです。



④ 3歳2ヵ月。③とほとんど変わりません。



⑤ 4歳6ヵ月では前歯のすき間も消えています。



⑥ 6歳5ヵ月。前歯が永久歯（えいきゅうし）に生えかわりました。歯の間のすき間は、隣の永久歯が生えたと次第に狭くなっていきますので、心配ありません。上唇小帯も問題ありません。

歯ならびや発音に問題が出てくる事もあるので3歳頃からは上の前歯が生えるまでは、かかりつけの歯医者さんで経過観察をしてもらいましょう。

「安井利一監修：子どものための歯と口の健康づくり。医歯薬出版、2000. より」

※公益社団法人神戸市歯科医師会作成の原案より改変して使用

「乳歯列期における上唇小帯の形態と付着位置に関する調査研究」小児歯科学雑誌 57（4）：444-450 2019より

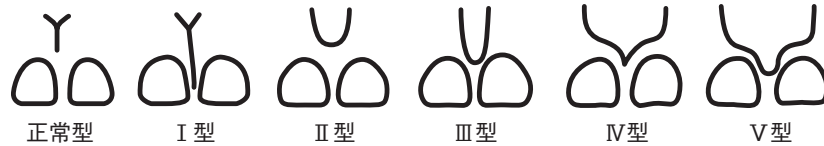


図1 上唇小帯の分類（図示）

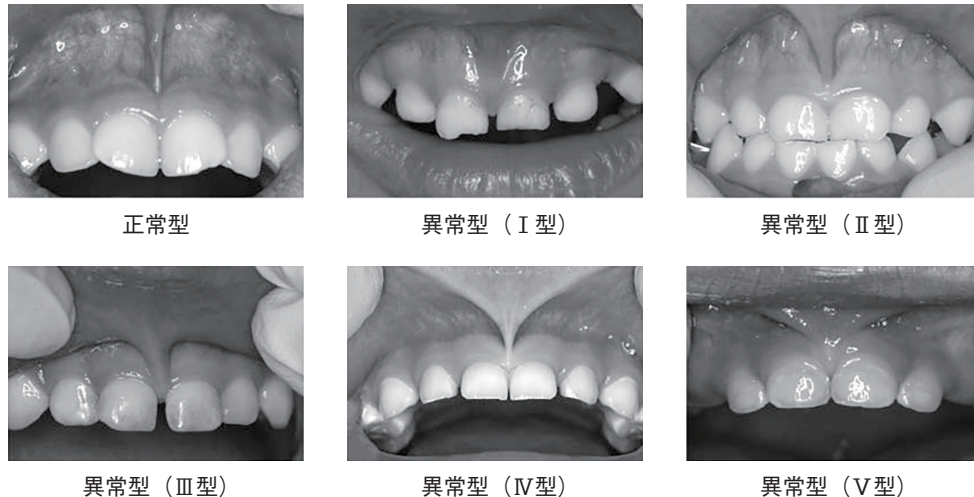


図2 上唇小帯の分類（参考画像）

野坂久美子ら：1歳6ヵ月児歯科健診に関する研究－上唇小帯について－,小児歯誌,22：262-271,1984らの評価方法を参考として分類

- 上唇小帯は顔面頭蓋の成長ならびに歯の萌出に伴う歯槽骨の高さ増大により、形態は線状に、付着位置は低位に移動し、10代後半には安定するといわれ、増齡的に正常型が増加するとされる。
- 3歳では主にI型ならびにII型であり、上唇小帯付着異常が認められたとしても経過観察を行うことが適切であると考えられる。
- 5歳頃に迎える上顎間縫合の成長が上唇小帯を左右に広げて帯状を呈させ、同時に歯槽表面への骨添加により歯槽骨の高さを増大させ、結果として上唇小帯が帯状を呈し、かつ付着位置を高位に変えていく可能性が考えられる。
- 4歳から5歳頃に認められる上顎骨の前下方への発育において相対的に小帯付着位置は低位に移動するといわれているが、高位付着肥厚型ではそもそも小帯が肥厚して移動しにくいことや、肥厚による機械的刺激や成長に伴う弾性刺激により硬い繊維性結合組織となり、低位に移動することなく小帯が発達し、分化したと推測される。
- 5歳ではIV型ならびにV型を包括する高位付着肥厚型が多い傾向にあるため、上唇小帯異常が継続する可能性が示唆された。したがって、永久前歯交換期に認められる正中離開の原因や口唇閉鎖機能に影響を及ぼすことを念頭に置いた対応が求められる。
- 上唇小帯の形態と付着位置の異常は成長発育に伴い改善が見込まれる場合があり、小帯の切除術は低年齢での施行は避け、障害の程度を診査し、9歳以降まで経過観察し、その後切除するか否かを診断する。

「乳歯列期における上唇小帯の形態と付着位置の経時的変化に関する研究－2年間の追跡調査－」

（第59回日本小児歯科学大会）より

年少においてIV型やV型が認められた場合、永久前歯交換期に認められる正中離開や口唇閉鎖機能に影響を及ぼすことを念頭に置いた対応が必要となることが示唆された。